

中村拓磨

ジョージア工科大学航空宇宙工学科
UAV Research Facility

11月30日

アメリカに帰ってきてから3ヶ月が経ちました。僕は、これが3回目の長期滞在ですが、南部は初めてということもあり色々発見が多いです。デトロイド、シカゴに次いで全米で3番目に治安が悪いと言われるアトランタですが、キャンパスの付近に居る限りは至って平和です。今学期は授業、研究に忙しくてほとんど歩けていないのですが、冬休みは少し観光をしようかと思っているので街の様子は次回以降の報告書に書きたいと思います。

僕は UAV Research Facility という研究室で無人航空機の研究をしています。この3ヶ月は MATLAB と C 言語で、UAV の経路設計に必要なモデルを作っていました。先週のミーティングでまとめた成果を報告して、次の学期はハードウェアの方にも手を出して、実装して行きたいと思っています。日本だとなかなか無い経験ですが、Nick という年上の学部生が教授に雇われて（と言っても学部生は基本的にお金をもらうのではなく単位をもらいます）僕の下で働いてくれています。僕の作ったシミュレーションでせっせとパラメータを変えてデータを取ってきてくれます。学部生と Ph.D の扱いの差はアメリカでは日本以上にかなり大きい気がします。学部生は基本的にデスクもないし、研究室の鍵ももらえないし、研究室のネットワークも使えないからできることが限られるのは仕方がないとは思いますが。

以前もアメリカの研究室で働いていたことがあるので、研究室はだいたい予想通りの環境です。日本に居た時の研究室と比べれば人間関係は少しドライですが、ラボメイトの defense が終わったり、自分の国に帰るなどと言った時は近くのバーに歩いて行って軽く飲んだりもします。アメリカの研究室は基本的には雇用なので、成果が出せないとクビになります。どの研究室はよく追い出されるとか、この研究室は忙しすぎる、などと言ったことがまとめられた掲示板が作られて研究室を探している学部生やマスターの学生がよく質問しています。僕も数週間前に掲示板に招待されて一応登録しましたが、卒業まで研究室探しはしなくて済むように頑張りたいです。

こちらで Ph.D の学生をはじめて感じるのは、Ph.D の学生でいることが意外と快適な点です。キャンパスの中はもちろん、友人とパーティに行っても銀行にアカウントを作りに行っても、なんとなく会話から尊敬してもらっている感じがすること。ジョージア工科大の航空宇宙工学ということもあるのだとは思いますが、"It's rocket science" (理解が難しいもの) という表現もあるぐらいなので、航空宇宙とはこちらの

人にとって訳の分からないもの、という理解なのかもしれません。なにはともあれ尊敬してもらって悪い気はしません。

日本の博士に行っていたらどうだっただろう、と少し考えさせられます。日本で博士課程の学生をやっていた訳ではないので正確な比較はできません。しかし、日本の友人に「博士課程に進学するんだ！」と報告して回った時の反応と、先輩達の話から僕が感じるのは、日本の博士課程に進学していても、周りからの評価という点ではここまで快適ではなかったかなと思います。就職に失敗した人の受け皿として使われているだとか、親のスネかじって10年も大学生やっているだとか、なんとなく印象がよくないのは僕だけでは無いかと思います。博士が100人いる村という動画が少し前にはやりましたが、あそこまで悪意に溢れていないにしても世間で言う博士とは、多少似た評価なんじゃないだろうかと考えさせられます。日本でもアメリカでも、博士の学生がやっていることは同等に意義のあり、誰でもやれることでは無いと思うのですが、同様に苦勞して生きていくなら、世間から尊敬されて生きていたいものだ、と思います。

アメリカは日本以上の学歴社会だと言われますが、まだそこまで違いは伝わってきません。ただ、会社の上位層や軍のお偉いさんの多くがドクターを持っているのは少し日本人としては違和感です。日本の会社の多くは学部卒の東大や早稲田や慶応の文系の人達が率いているイメージだったので、それも含め、Ph.Dが多方面で評価される文化ということなのではないでしょうか。博士の学生でいる快適さはこの辺りの評価からくるものかもしれない。

僕がアメリカを目指したのは前回の報告書に書いた通りです。アメリカに憧れ、航空宇宙の最先端の地に夢を描きここまで来ました。ただ、ひねくれ者の僕は、どこかでなんとなく日本の博士に対する評価が億劫になり、日本から離れたのかもしれない。社会からも認められて生きて行くのは大事なことだと思います。

日本の博士課程の問題はよく議論に上がり、解決策も議論されていますが、我々博士課程の学生が望むのは、社会から愛されて学ぶことなのかもしれない、と考えさせられます。

これをもって今回の報告書とさせていただきます。これからも、船井財団の支援に値する人間として生きて行けるよう勉強、研究に励んで行こうと思います。支援に心から感謝いたします。

中村拓磨